

小学校劇名作全集

上 級



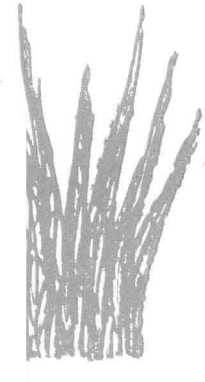
日本演劇教育連盟編



小学校劇名作全集

上 級

日本演劇教育連盟編



日本演劇教育連盟

小学校劇名作全集 上級

国土社 1974

270 p 22cm

基本カード記載例

日本演劇教育連盟

1937年に創設され、はじめ日本学校劇連盟と称したが、1959年に改称された。幼児から小、中、高校までの教師および児童演劇、サークル演劇の活動家、学生によって組織される自主的研究団体。月刊の機関誌『演劇と教育』を発行。

会長＝菊田要，事務局＝東京都豊島区長崎1-20-7

電話（974）3598 郵便番号171

小学校劇名作全集／上級

1968年10月25日

初版発行

1974年12月5日

7版発行

検印廃止

編者 日本演劇教育連盟

発行者 長宗泰造

印刷所 株式会社 厚德社

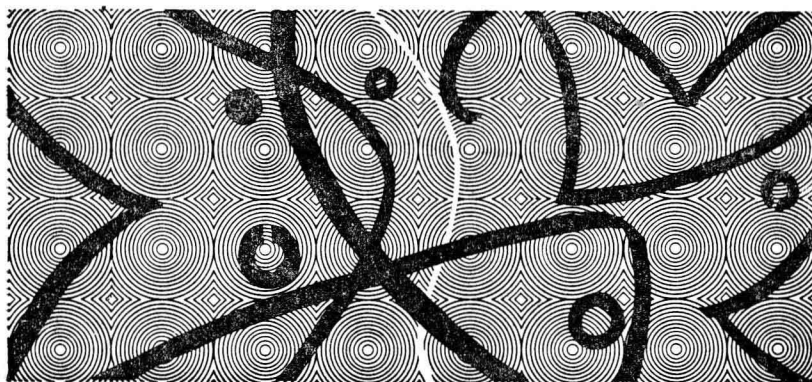
発行所 株式会社 国土社

東京都文京区目白台 1-17-6

電話（943）3721（代）

振替 東京90631

郵便番号 112

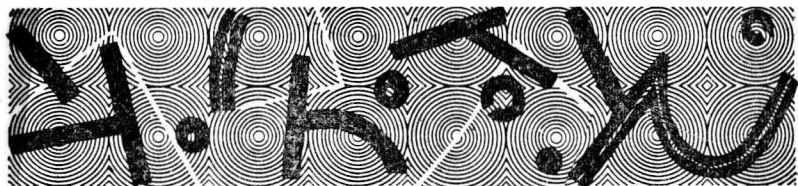


まえがき

わたしたちは、一九五四年に、明治以後のわが国の学校演劇の脚本のなから、今日の上演にたえるすぐれた作品を精選し、『日本学校劇名作全集』を編集しました。さいわい、このシリーズは好評を受け、学校演劇の代表的標準的脚本集として、重要な役割を果たしてまいりました。

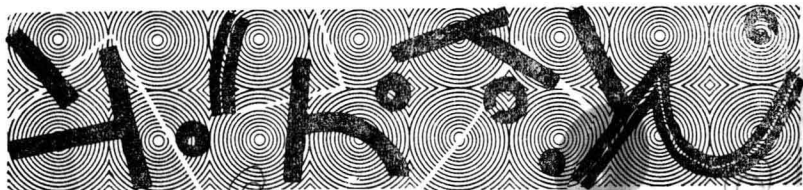
しかし、その後、演劇教育運動のなかで、数多くの脚本が書かれ、日本の学校演劇脚本の定本というのには、やや不十分なものになってきました。そこで、旧版を改め、あたらしい作品を加えて、このシリーズを刊行することにしました。

このシリーズこそは、名実ともに、わが国の演劇教育運動のなかから生まれた、永い命をもつ代表的脚本集であると信じます。このシリーズが、子どもたちの演劇活動をゆたかにし、日本の演劇教育運動を、さらに発展させるための道標となることを念ずるものです。



もくじ

百姓親子とロバ	武者小路実篤	5
・登場人物Ⅱ男二人	・上演時間Ⅱ約10分	
北風のくれたテーブルかけ	久保田万太郎	9
・登場人物Ⅱ男3人、女2人	・上演時間Ⅱ約60分	
鶴一と亀二	斎田 喬	32
・登場人物Ⅱ男6人、女2人	・上演時間Ⅱ約18分	
鉄道開通	内山 嘉吉	43
・登場人物Ⅱ男5人、女2人	・上演時間Ⅱ約25分	
学級図書館	落合聡三郎	57
・登場人物Ⅱ男14、15人	・上演時間Ⅱ約18分	
時	栗原 一登	66
・登場人物Ⅱ男10人、女6人	・上演時間Ⅱ約15分	
風の歌	秋月 桂太	74
・登場人物Ⅱ男24人、女27人	・上演時間Ⅱ約12分	
ずんぐり	吉岡たすく	81
・登場人物Ⅱ男、女 数名	・上演時間Ⅱ約25分	
歌をわれらに	岡 一太	94
・登場人物Ⅱ男8人、女3人	・上演時間Ⅱ約25分	
パンナナと殿さま	筒井 敬介	115



・登場人物Ⅱ男10人 その他 ・上演時間Ⅱ約30分
犬がほしいなあ 筒井 敬介 126

火 岡田 陽 134
・登場人物Ⅱ男、女おおせい 上演時間Ⅱ約30分

・登場人物Ⅱ男、女おおせい 上演時間Ⅱ約30分
ペスは汽車にのって 白波瀬道雄 151

・登場人物Ⅱ男8人、女6人 上演時間Ⅱ約30分
桃太郎 富田 博之 165

・登場人物Ⅱ男9人、女3人 その他 上演時間Ⅱ約35分
道具係 粉川 光一 181

・登場人物Ⅱ男9人、女5人 その他 上演時間Ⅱ約20分
すばらしいコーラ 粉川 光一 192

・登場人物Ⅱ男14人、女1人 上演時間Ⅱ約45分
おおかみがきた 生越 嘉治 210

・登場人物Ⅱ男、女おおせい 上演時間Ⅱ約25分
よだかの星 宮沢 賢治原作 ・ わだ よしおみ脚色 224

・登場人物Ⅱ男7人、女3人 上演時間Ⅱ約35分
立のき 岡部 房子 237

・登場人物Ⅱ男7人、女2人 上演時間Ⅱ約20分

作品と作者について.....

楽 譜.....

■編集／日本演劇教育連盟

・編集担当委員

石原 直也

北村 小夜

庄司 弘美

副島 功

辰嶋 幸夫

富田 博之

桃井 恒春

■装置図／ 岩田 健

滝口 二郎

谷川 隆二

■装 幀／ 市川 禎男

■カット／ 五百住 乙

百姓親子とロバ

武者小路実篤作

■登場人物＝男2人

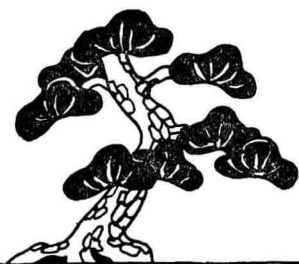
■上演時間＝約10分

■あらすじ

フォンテーヌの寓話の「百姓とロバ」をもとに、狂言風な様式で脚色した作品である。—— 百姓親子がロバを売りに出かける。ロバをひいていくと、人びとが、なぜ乗っていかぬかという。息子が乗る。人びとは親不孝だという。こんどは父親が乗る。人びとは親ばかり乗っていく、といって非難する。こんどは二人でロバに乗っていく。人びとがまた非難する。しかたなく二人は、ロバの足をしばってかついでいくことにする。人の評判ばかり気にして、自主性をもたぬ人びとを痛烈に風刺している狂言の形式に特色をもつ作品である。

ホリゾント

ほりもの (外公はめ)



Taki

父 私はこの近所に住む百姓です。今日は天気がいいので息子の鈍太郎とロバを町に売りに行く途中です。どうもこの頃は不景気なのでたかく売れるといいがと思っています。おい鈍太郎、そろそろ歩こうか。

子 ええ。

父 いい天気で気持ちがいいな。

子 本当に気持ちがいい。

父 今の奴は俺たちのことを何とかいったようだな。

子 はい、今の人たちは私を馬鹿だと申しております。

父 なぜ馬鹿だというのだ。

子 ロバをただ歩かして、だれも乗らないのは馬鹿だと申しました。

父 それはたしかに一理がある。それじゃ、お前が乗ったらいいだろう。

子 いや私は歩く方が好きです。

父 俺だってまだつかれない。歩く方がいい。だが馬鹿だといわれては腹がたつからのれ。

子 それじゃ私がのりましょう。

父 のれ、のれ。

子 おとうさん、私はおります。おとうさんおのりください。

父 なぜだ。

子 今すれちがった男が、私のことを親不孝だ、親に歩かせて自分がのっているといいました。

父 そうか。それじゃ俺がのらなければならぬまい。

子 どうか、そう願います。

父 鈍太郎、お前ものれ。

子 どうしてです。

父 今すれちがった奴が、あの爺はひどい奴だ。自分だけがのって子どもを歩かしているといった。だからお前ものれ。

子 はい。はい。

父 どうだ、これなら悪口はいうまい。

子 おや申しました。あんなロバに二人がのるとはかわいそうだ。残酷な人もあるものと申しました。

父 そうか。それならおりにしよう。さてどうしたらいいかね。

子 私たち二人で、このロバをかつぐことにしましょう。

う。それより他に道がありません。

父 それはそうだ。いいことに気がついた。さすがお前は俺より利口だ。だれも、のらないでもいけないし俺がのっても、お前がのってもいけないし、二人がのってもいけないれば、あとは二人でかつぐより仕方がない。重いがやむを得ない。どれ足をゆわえてかつぐとしよう。

子 何んでゆわきましょう。

父 どこかにわらなわがおっこつてゐるだろう。

子 おっこつていました。

父 それでゆわこう。

子 ええ。

父 ロバの奴はゆわかれるのがいやと見える。しかし皆から笑われては困る。しばらくの間だ。しんぼうしろ。それから棒をどこかからかりておいで。

子 はい。

父 さあ、かつごう。なかなか重い。これなら皆感心するだろう。

子 いやおとうさん、皆、私たちを馬鹿だといって笑っ

ています。

父 そうか。それじゃおろそう。こんどはどうしたらいいのかね。ああ汗をいっぱいかいた。

子 他にしようがありません。

父 ロバを一人で歩いてはいけない。だれがのつてもいけない。かついででもいいけない。困ったな。どうにもしようがない。のつてもいけない。のらないでもいいけない。かついででもいいけない。

子 おとうさん。

父 なんだ。

子 こうなったら、もうやぶれかぶれです。

父 どうもしようがないな。

子 おとうさん、どうせもう笑われるにきまつてゐるのですから、私たちの好きなようにしましょう。

父 それならどうするのだ。

子 ロバを歩かせましょう。そして私たちがのりたかつたのりましょう。

父 どうも悪口いわれるのは気持ちがよくない。

子 しかしここにじっとしていてもどうせ悪口はいわれ

ます。

父 そうだな。それならお前のいう通りにしよう。

子 おとうさん、まあおのりなさい。

父 そうか、それなら少しくたびれたからのろう。

子 おとうさん、今の男は私のこと親孝行で感心だとい
いましたよ。

父 そうか。それはよかった。

子 だが、あてになりませんよ。おとうさん、私はくた
びれました。

父 それなら今度はお前がのれ。

子 ええ。

父 おお。今の男は俺のことをほめた。親はやっぱりあ
りがたいものだってね。

父と子 さあ皆さん。ここで私たちはラ・フォンテーン
にかわって皆さんに申しあげます。世間の悪口はお気
になさらずに皆さんがいいと思う通り何事でもおやり
なさい。勇気を出して自分の思う通りやると万事は皆
さんの意志を尊敬するものであります。他のもののい
うことを気にしたら切りのないものです。ついに

は皆さんはこの世から消えてなくなればならな
いことになります。いじけずに大きな顔して天下の大
道をお歩きください。私たちもこれからいじけずに大
道を歩くつもりです。ロバお前もいばって歩け。

——終り——

北風のくれたテーブルかけ

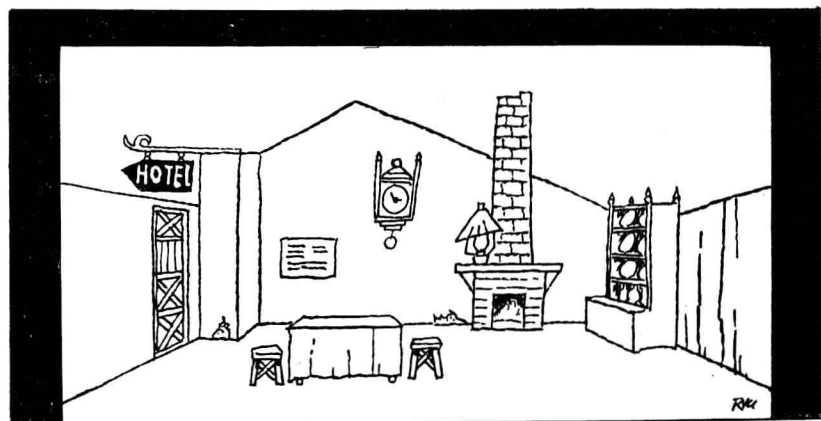
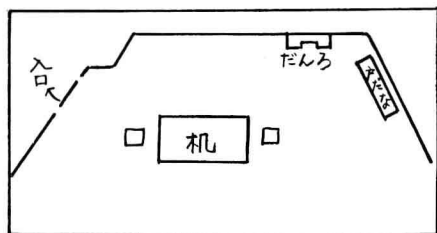
久保田万太郎作

■登場人物＝男3人、女2人

■上演時間＝約60分

■あらすじ

ブーツ少年は、魔法のテーブルかけから、いろいろな料理を出して、宿屋の亭主を驚かす。魔法のテーブルかけは、北風がブーツの手から、米をみんな吹きとばしてしまったおわびに、くれたものだ。家に帰ったブーツが母の前に料理を出そうとするが出てこない。宿の亭主が取りかえたのだ。ブーツはもう一度北風のところへ、テーブルかけを取り返す方法をたずねに出かける。そこへ来たのは宿の亭主。吹きたおされたかしの木を弁償してくれと、北風にいうのだ。



第一場

宿屋。

夜。

宿屋のかみさんは、せんたくものにアイロンをかけている。

ていしゅは火のそばで、たばこをのんでいる。

宿屋のていしゅ 月日のたつのははやいものだ。——お

まえと、おれと、この商売をはじめてからもう十年になる。

宿屋のかみさん 十年に？

宿屋のていしゅ かんじょうしてごらん、そうなるから。

宿屋のかみさん (かんじょうしてみて自分に) ほんとうだ。——(ていしゅに) ほんとうに、そうなります

ね。

宿屋のていしゅ あの時分は、おれたちは、ずいぶん貧乏だった。それを思うと、このごろは、うそのように金持になった。(と、ひとりごとのようにいう)

宿屋のかみさん ほんとにねえ。

宿屋のていしゅ だが、まだいけない。——こんなことじゃあまだいけない——もつともつと、おれたちはもうけなくちゃあいけない。(と、やっぱりひとりごとのように)

宿屋のかみさん そうですわね。

宿屋のていしゅ だが、宿屋って商売は、いい商売だ。

——おまえ、そう思わないか。

宿屋のかみさん そう思いますわ。——ほんとうにいい商売ですわ。けど、この四、五日はちつともお客さまがきませんね。

宿屋のていしゅ たまにはこないこともあるさ。——こ

なくったってだいじょうぶだ。

宿屋のかみさん どうしてこなくたってだいじょうぶです？

宿屋のていしゅ こんど、お客がきたら、そのお客から、二人分でも、三人分でも、よけい金をとってやればいいじゃないか。(笑う)——まったく、宿屋って商売はこたえられない商売だよ。

宿屋のかみさん　そうできればいいけど……。

宿屋のていしゅ　（戸をたたく音きこえる）お待ち。

——だれか来たようだ。

宿屋のかみさん　そうですか。

宿屋のていしゅ　あけてごらん。

宿屋のかみさん、入口の戸をあける。

——ブウツ、外に立っている。

ブウツ　こんばんは。——とめてくれますか？

宿屋のていしゅ　いらっしゃいます。——さあ、どうぞ

……。（立ちあがる）

ブウツ　とめてくれますか？

宿屋のていしゅ　ええ、ええ、どうぞ……。

ブウツ　そうですか、ありがとう。

ブウツ、はいってくる。

宿屋のていしゅ　ときに、おなかはいかがです？　——

まだお夕飯まえじゃありませんか？

ブウツ　ええ、まだです。これからです。

宿屋のていしゅ　じゃあ、すぐおしたくを。——（かみ

さんに）おい、おまえ……。

ブウツ　（とめて）いいえ、いいんです。——食べるも

のはここに持っていますから。（かくしから小さくた

たんだテーブルかけを出す）

宿屋のていしゅ　それは？

ブウツ　テーブルかけです。（といいながら、テーブル

の上に、それをひろげる）

宿屋のていしゅ　なるほど。——で、めしあがるもの

は？

ブウツ　まだ、ぼくがほしいといわないから出てきませ

ん。

宿屋のていしゅ　出てこない？

ブウツ　ええ——ぼくが、いま、何か食べたいなと思っ

と、その食べたいものがひとりで、このテーブルか

けの上に出てくるんです。

宿屋のていしゅ　お客さま、あなたはお気はたしかです

か。

ブウツ (笑って) だいじょうぶですよ。——ほんとかうそか、見ていればわかります。

宿屋のていしゅ (おかみさんのそばへよって) おまえ、そんなことができると思うかい？

宿屋のかみさん (首をふって) 思いませんわ。

ブウツ ラビット・パイと、あげたじゃがいもと、しおくるみと、ジャムのはいったブディングとレモン水を一本と。——それだけ……。

ブウツ、テーブルかけにむかってそういう。——見るまに、テーブルかけの上はそれらのものでいっぱいになる。(じっさいにこれをやる場合には、とくにそういうしかけをしてもいいし、でなくとも、黒い灰色のいししょうを着た後見が、テーブルの上にそれらのものを持って出てもいい。——もちろんその出かたには多少のくふうが必要である)

宿屋のていしゅ (ぎょうてんする) ——出た。——出

た……。

ブウツ じゃあ、ぼく、おなががすいてますから食べます。(いすに腰をかけて食べかける)

宿屋のていしゅ ふしぎだ。——じつにふしぎだ……。

宿屋のかみさん ねえ、ほんとうのものかしら？

宿屋のていしゅ ほんとうのものだ。ほんとうのごちそうだ……。

宿屋のかみさん おまえさん、聞いてごらんなさいよ。

——どういうわけか聞いてごらんなさいよ。

宿屋のていしゅ うん、聞いてみる……。 (ブウツのそばにまたよって) お客さま、いったい、ど、どういうわけでございます。

ブウツ (食べながら) どういうわけもあります。——

——このテーブルかけは、まほうのテーブルかけです。宿屋のていしゅ まほうの……？

ブウツ 「北風」のおじいさんからもらってきたんです。

「北風」のおじいさんは、ぼくのお米を、ぼくの手からみんな吹きとばしてしまったかわりに、気の毒だといつてこれをぼくにくれたんです。

宿屋のていしゅ お米をふきとばしたというのは……？

ブウツ 十日ぐらいまえます。……夕方、おかあさんにいわれて、そのぼんたべるお米を、うらへ出しにいったんです。——見ると、もう、そのぼんたべるだけ、一つかみしか、入れものの中に、なかったんです……。

宿屋のていしゅ ……（うなづく）

ブウツ だから、たいせつにそれを持って、台所の方へこようとすると、きゆうにピューッと北風がふいてきたんです。——ぼく、飛ばされちゃたいへんだと思って、両手でしっかりとぎっていたんです……。

宿屋のていしゅ ……（うなづく）

ブウツ と、また、ピューッと、まえよりも強くふいてきました。——あっと思って、ぼく、よけようとするはずみに、うっかり手をゆるめて、しまったんです。

……。

宿屋のていしゅ ……

ブウツ （がっかりしたように）ふきとばされてしまったんです。——一粒も残らず……。

宿屋のていしゅ ……

ブウツ ぼく、すごすご、おかあさんのところへ帰りました。——おかあさんにあやまりました。おかあさんは、けど、しかりませんでした。——ぼくのおかあさんは、ほんとうにいいおかあさんなんです。

宿屋のていしゅ でも、それっきりお米がなかったんではおこまりでしたらう？

ブウツ おかあさんは、おなかがいっぱいだから、ばんのご飯はいらないといいました。——そういつて、ぼくには、あしたの朝にとつてあつた牛乳をくれました。——（元氣よく）それを飲んだら、いせいがつきました。

宿屋のていしゅ （つりこまれて）いせいが……？

ブウツ ええ、そうして、ぼくいいことを考えました。宿屋のていしゅ いいことを……。

ブウツ 北風は、つまり、ぼくたちのご飯を横取りしたんです。——だから、ぼく、北風のところへいって、かけあつたほうがいい。——かけあつて返してもらったほうがいい——そう思いました。

宿屋のていしゅなるほど。

ブウツ　すぐに、ぼく、出かけようと思ったんですけど、おかあさんが、こんやはいけない、あしたの朝におしといったんです。——それからそのぼんはねて、あくる日の朝、おてんとさまが出るといっしょにうちを出ました。——そうして北風のふいてくるほうへと顔をむけて歩きました。

宿屋のていしゅ　そうして、とうとう、北風におあい

……。

ブウツ　あいました——あつてかけあいました……。

宿屋のていしゅ　……

ブウツ　このテーブルかけさえあれば、もうおかあさん、ぼくも、一生こまりません。——北風のおじいさんはしんせつです。——ほんとにしんせつです。

宿屋のていしゅ　うちの、これの木を吹き倒したのはあれはだれだ。——北風のやつじゃあなかったか？

宿屋のかみさん　そうです、北風です……。

宿屋のていしゅ　よし。——じゃあ、おれも、あした北風のところへいってやるぞ——そうして、おれもに

れの木のかわりに何かもらってきてやるぞ。(と、ひとりごとをいう)

ブウツ　(食べおわる) ああうまかった。——おなかがいっぱいになった……。

宿屋のていしゅ　もうおしまいでございますか？

ブウツ　とてもそうは食べきれません。——まだたくさん残っています。——あと、そっちへ持って行って食べてくれませんか？

宿屋のていしゅ　ごちそうしていただけますか？

ブウツ　どうぞ。——とても、それは、すてきですよ。

宿屋のていしゅ　じゃあ、えんりょなくごちそうになります。

宿屋のていしゅ　かみさん、ふたりで、もう一つのテーブルにさらにみんな運ぶ。

宿屋のていしゅ　このテーブルかけは……？

ブウツ　ああ、それは、ぼくがします。(ていしゅからうけとってたいせつにまたかくしの中に入れる)